

事例3 作業的な学習から言語活動への展開（地理B）

1 ねらい

新学習指導要領において、全ての教科にわたる改善事項として、言語活動の充実があげられている。このことは、地歴科、公民科をあわせた改善の具体的事項にも明記されている。また地理歴史科における改善事項の一つとして、地図の活用を重視することが求められている。

発表したりまとめたりするといった様々な学習活動を取り入れることは、現行の学習指導要領においても重視されているものの、時間的な制約の多い「地理B」の授業においては意識的、意図的に行われてきたとはいえない部分がある。また、地図の活用という点においても、実際に生徒が作業的・体験的な学習を行う時間は十分確保されていなかったのではないだろうか。

そこで、本事例では、言語活動の機会をできるだけ多く設ける工夫を試みた。「地理B」の地誌学習において、1つの小单元につき1テーマを設定し、ワークシートを工夫して、説明や発表、討論等の言語活動を20分程度で実践することとした。そしてその際、地図を活用し地理的技能を高めるため、データを地図化したりグラフ化したりする作業的な学習をあわせて行った。自作した地図等をもとに考察して文章にまとめることで、基本的な地理的技能を身に付けさせるとともに、資料活用能力や、思考力、表現力を育成したいと考えた。

なお、実践は第3学年を対象に行った。

2 授業実践

実践1 韓国の気候と文化

(1) 指導のねらい

- ・雨温図から韓国の気候の特色を読み取り、生活や文化と気候との関連について考察して、適切に表現する。

(2) 実践の概要

時間	学習活動	指導上の留意点	評価計画〔評価方法〕
20分 ※	<ul style="list-style-type: none"> ・朝鮮半島や韓国の生活や文化について、知っていることをワークシートに記入する。 ・ソウル、東京、札幌の月別平均気温と降水量のデータから、それぞれの雨温図を作成する。 ・雨温図からソウルの気候の特色を読み取り、記入する。 ・韓国の気候と関連があると考えられる、生活や文化について考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・日本のデータは自分の持っている資料から探すよう指示する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・雨温図から韓国の気候の特色を読み取り、気候と生活・文化との関連について考えて、適切に表現している。 <p>【資料活用 of 技能・表現】 【思考・判断】 〔ワークシート〕</p>

※時間は授業時間50分の中で本実践にあてた時間を示している。他の実践も同様である。

まず、韓国や朝鮮半島の生活や文化について知っていることを書くように指示した。なかなか思い浮かばず、書き出せない生徒が多くみられたが、キムチ、チマ・チョゴリ、ハングル文字などをあげることができた。

次に、ソウルと東京、札幌の3つの都市の雨温図を作成させた。定規を使い丁寧に書く生徒が

多く、予想以上に時間がかかった。3学年なので作業は早いのではないかと考えていたが、実際にはこのような作業にあまり慣れていないという実態が明らかになった。

雨温図からソウルの気候と東京の気候との共通点と相違点をあげ、それを踏まえて韓国の気候の特色を文章でまとめるように指示した。共通点としては「東京と同様に温暖である」ことがあった。相違点としては「夏の降水量が多い」ことをあげた生徒が多く、教師が意図していた「冬の気温が低く寒さが厳しい」ことをあげた生徒は少なかった。

その後、最初にあげた韓国や朝鮮半島の生活や文化のなかで、気候と関連があると考えられるものを記入させたが、あげることでできた生徒は少なかったため、後日解説を加えた。

今回は、生徒がまだ書くことに慣れていなかったため、なかなか文章を書きだすことができなかったことや、雨温図の作成にも手間取ったことから、予想以上に時間がかかった。適切な作業の分量についても検討する必要がある。

[生徒が記入したワークシート例]

地理演習プリント① 名前 _____

《朝鮮半島》

◇ 日本は、古くから朝鮮半島と交流をもっています。韓国や朝鮮半島の生活や文化について、知っていることを挙げてみよう。

整形してる人が多い
反日意識が深い(おじいちゃん、おばあちゃん世代)
徴兵が義務づけられている。

◇ ソウル・東京・札幌の雨温図を作成して、韓国の気候の特徴を考察してみよう。

※ ソウルの観測データ

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	全年
平均気温℃	-2.5	0.3	5.2	12.1	17.4	21.9	24.9	25.4	20.8	14.4	6.9	0.2	12.2
降水量mm	21.6	23.6	45.8	77.0	102.2	133.3	327.9	348.0	137.6	49.3	53.0	24.9	1344.2

(大韓民国気象庁HPより)

(ソウル)

(東京)

(札幌)

気候の共通点

気温は東京と同様に温暖である。

気候の相違点

7,8月の降水量が非常に多い
日本より9月が多いが韓国は少ない

※したがって、韓国の気候の特徴は?

気温は温暖だが降水量は少ない。(夏は多い) 冬は乾燥

◇ このような気候の特徴から、朝鮮半島に見られる特有のものは何ですか。

実践2 中国における人口の集中

(1) 指導のねらい

- 中国における人口集中の特徴について地図から読み取り、適切な資料を選択して人口集中の要因を考察し、表現する。

(2) 実践の概要

時間	学習活動	指導上の留意点	評価計画〔評価方法〕
20分	<ul style="list-style-type: none"> 中国の白地図で、人口密度の高い上位10か所の省、自治区、直轄市を塗りつぶす。 中国の人口分布の特徴を地図から読み取って記述する。 一人あたり地区総生産が上位10か所の省、自治区、直轄市を赤線で囲む。 人口密度と一人あたり地区総生産との間に関連があるか考える。さらに、人口密度が高い理由について、根拠となる資料を選んで説明する。 	<ul style="list-style-type: none"> 根拠とする資料は、指定した地図帳のページに掲載されている主題図から選ばせる。 	<ul style="list-style-type: none"> 中国における人口集中の特徴について地図から読み取っている。 【資料活用の技能・表現】 〔ワークシート〕 中国における人口集中の要因について、適切な資料を選択して考察し、表現している。 【思考・判断】 〔ワークシート、観察〕

まず、中国で人口密度の高い上位10か所の省、自治区、直轄市を、白地図で塗りつぶす作業をさせた。時間が十分に確保できるなら階級区分図をすべてかかせたいが、**実践1**での反省から生徒の作業量を減らそうと考え、人口密度の高い地域がわかる階級のみに絞った。それでも生徒は省などの位置を探すのに手間取っていた。次に、作成した地図から読み取れる特徴を記入させた。生徒は、人口密度は中国東部の沿岸部で高いという特徴をとらえ、記入していた。

人口密度が高いのはどのような要因によるものかを考察させるため、ひとつの例として、同じ白地図に、一人あたり地区総生産の上位地域をかきこませて、関連性がみられるかどうか問いかけた。完全に一致はしないものの重なりもみられることがわかるが、生徒はそれをどのように表現したらよいのか、書きあぐねている様子であった。そこで「一人あたり地区総生産の多い地域は人口密度も高い傾向がある。」という記述例を示した。ワークシートの問いかけ方にも改善の余地があったと思われる。その後、地図帳に掲載されている中国のいくつかの主題図を活用して、他にも人口の集中にかかわる要因がないか考えさせた。生徒の記述をみると、沿岸部における工業化の進展の面からの説明以外に、気候や交通の面など様々な角度から説明しており、それぞれ自分なりの視点で考えた様子がみられた。

名前 _____

地理演習プリント②

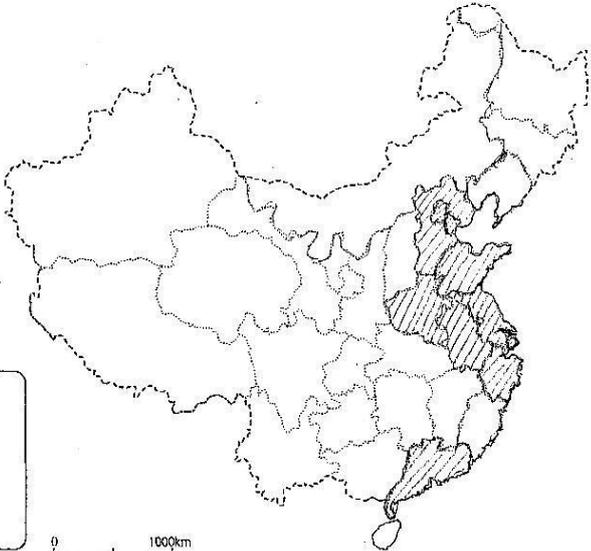
《中国》

◇ データブックp.38を参照して、人口密度が高い省・自治区・直轄市の上位10カ所に、の模様を書き込もう。

※ ちなみに、日本の人口密度は、
_____ 338.7人/km² _____

◇ 中国の人口分布には、どのような特徴が見られますか。

東側の沿海部に集中している。



◇ 人口が集中している理由を考えてみよう。

(1) データブック同ページから、1人あたり地区総生産が多い省・自治区・直轄市の上位10カ所を、赤色で境界線を囲んでみよう。

※ 人口分布と1人あたり地区総生産に、関連がみられますか？

地区総生産が高い所は人口集中が見られる。

(2) 人口が集中している理由を、地図帳p.13~14の主題図を使って説明してみよう。

→ 説明に使う主題図… _____ (4 ページの (番号) ① の図 _____

東部の沿海部に港があり原料や製品の輸出入がしやすいため、工場が数多く立つことにより、人口が集中する。

実践3 東南アジアにおける輸出品目の変化

(1) 指導のねらい

- ・東南アジア3か国の輸出品目の変化をグラフから読み取り、その理由について考察するとともに、それを裏付けるための適切な資料を選択する。

(2) 実践の概要

時間	学習活動	指導上の留意点	評価計画〔評価方法〕
	・タイ、マレーシア、インドネシアの3か国について、2004年の輸出品目の円グラフを作成する。	・机間指導を行い、グ	・タイ、マレーシア、イン

20分	<ul style="list-style-type: none"> ・1989年のグラフと比較して、輸出品目にどのような変化があったか読み取り、ワークシートに記入する。 ・輸出品目が変化した理由を推測し、ワークシートに記入する。 ・自分の推測を裏付けるには、どのような資料やデータがあればよいかを考える。 	<p>ラフが正しく作成できているか確認する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ビデオカメラとプロジェクタを使い、何人かの生徒の記述をスクリーンに示す。 	<p>ドネシアの輸出品目の変化をグラフから適切に読み取り表現している。</p> <p>【資料活用の技能・表現】 〔ワークシート〕</p> <ul style="list-style-type: none"> ・輸出品目が変わった理由について考察するとともに、それを裏付けるための適切な資料を選択している。 <p>【思考・判断】 【資料活用の技能・表現】 〔ワークシート、観察〕</p>
-----	--	--	---

タイ、マレーシア、インドネシアの3か国の2004年における主要輸出品と輸出額に占める割合をグラフ化する作業を行い、それを1989年のグラフと比較して、どのような変化がみられるかを記述させた。生徒の記入状況はおおむね良好であった。

次に、そのように変化した理由や背景について考えさせた。この実践では、資料をみて考えるのではなく、自分の考えた結論を裏付けるためにはどのような資料やデータがあればよいかを考えさせた。生徒の記述としては次のようなものがある。



(円グラフを作成する様子)

理由・背景「海外（日本）の企業が進出してきたこと。」
 必要な資料「国内の企業のうち、海外に本社のある企業の割合。企業に出資している人（企業の国籍別の出資額）」

理由・背景「工業化が進んだから」
 必要な資料「工場の立地数の変化」

実際に入手できるかどうかは別にしても、自分の意見の根拠となるのはどのような数値であるのか、自分なりに考えることができた。資料から結論を導くだけでなく、結論から必要な資料を考えるという逆の発想をしたことは、生徒にとって新鮮だったようだ。生徒の思考の幅を広げることに繋がる方法の一つと考えられる。

また、机間指導をしながら、ビデオカメラとプロジェクタを使って、何人かの生徒の記述をスクリーンに映して紹介した。発表の時間を節約できるとともに、なかなか書くことのできない生徒を指導することができた。スクリーンに映された記述を参考に、自分の記述を補足する生徒も見られた。

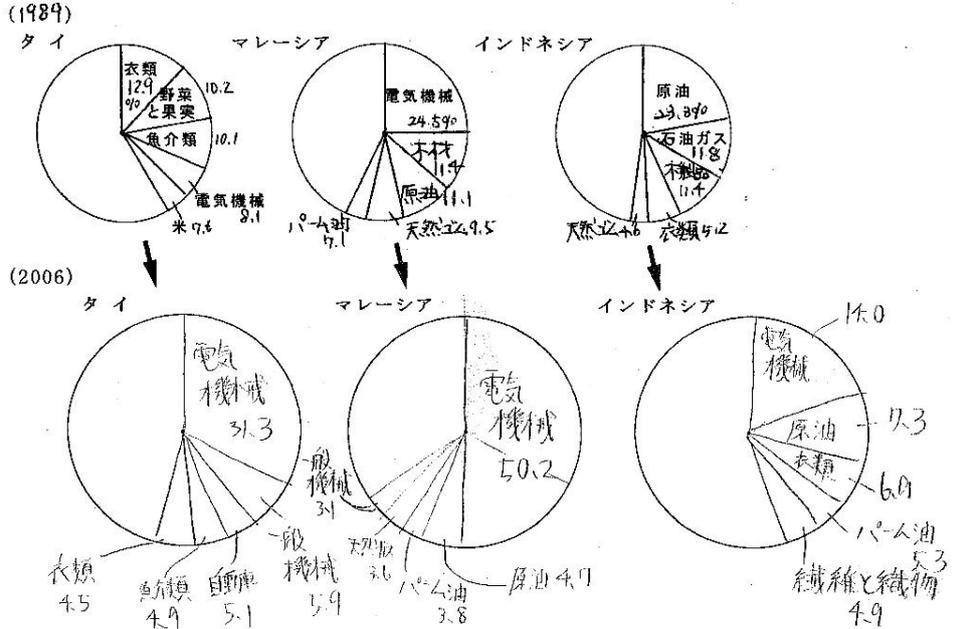
地理演習プリント③

名前 _____

《東南アジア》

◇ データブック p.132 を参照して、^{1989年}2006年のタイ・マレーシア・インドネシアの主要輸出品について、円グラフを作成しよう（下段）。

・主要輸出品と輸出額に占める割合



◇ 1989年と^{2006年}2006年を比較して、三か国の輸出品目には、どのような変化が見られますか。

電気機械の割合が大幅に増加し、資源・食料品・衣類などの割合が低くなった。

◇ 輸出品目が変化した理由を推測してみよう。

工業化が進んだから

発展 ほかにどのような資料・データが手に入れば、推測した変化の理由を立証できるだろうか。考えてみよう。

工場の立地数の変化

実践4 EU加盟国間の経済格差

(1) 指導のねらい

- ・ EU加盟国間の経済格差を地図から読み取り、経済格差がもたらす影響について考える。

(2) 実践の概要

時間	学習活動	指導上の留意点	評価計画〔評価方法〕
20分	<ul style="list-style-type: none"> ・ EUの加盟国数と国名を確認する。 ・ EU加盟国の中で、1人あたりの国民所得が2万ドル未満の国を、凡例の様様で塗りつぶす。 ・ 1人あたり国民所得が2万ドル未満の国にはどのような共通点があるのか考える。 ・ EU加盟国間の経済格差が拡大するとどのような影響が出るか推測して記述する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 地域だけでなく加盟年代や歴史にも着目させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ EU加盟国間の経済格差を地図から読み取り、経済格差がもたらす影響について多面的・多角的に考察している。 <p style="text-align: right;">【思考・判断】 〔ワークシート〕</p>

現在のEU加盟国数と国名を確認させた後、白地図で加盟国のうち1人あたりの国民所得が2万ドル未満の国を塗りつぶさせた。そして、所得の低い国にはどのような共通点があるのか考えさせた。生徒からは「ヨーロッパ東部」という地域に着目した解答が出たので、東ヨーロッパ諸国がEUに加盟した年代はいつなのか、また、加盟年代が新しいのはどうしてなのか、というように生徒とやりとりをする中で、既習事項を確認するとともにその地域の歴史にも着目させた。



最後に、資料集等も使って、EUの政策を復習しながら（データブックを見て作業する様子）ら、経済格差の拡大がもたらす影響について考えさせ、記述させた。生徒の記述には次のようなものがあつた。

・ 人、モノ、資本の移動が活発になり、企業間の競争は激化して、特定の地域に産業が集中する。EUの中心や北欧諸国などとの経済格差はなかなか縮まらない。

・ 政治的、経済的に統合をめざすのが困難となる。経済的に裕福な国への出稼ぎが増える。裕福な国に産業や人口が集中し、過密化の一方で過疎化もおこる。出稼ぎが多く来る国では失業者が増える。

・ ユーロを単一通貨として使いにくくなる。

中には「ユーロの価値が変わる。」等の誤った認識をしている生徒も多く見られたため、ワークシートを返却する際に説明を加えた。

実践5 環日本海経済圏構想から考える日本とロシア

(1) 指導のねらい

- ・日本とロシアの資源共同開発の在り方について討論することにより、日本とロシアの関係を多面的・多角的に考える。

(2) 実践の概要

時間	学習活動	指導上の留意点	評価計画〔評価方法〕
20分	<ul style="list-style-type: none"> ・環日本海経済圏に含まれる国を確認する。 ・日本の天然ガス輸入について、輸入国と輸入量に占める割合を表す円グラフを作成する。 ・ワークシートのサハリンプロジェクトについてのトピック記事を読み、資料集等も参考にして、日本はロシアと資源の共同開発をするべきかどうか考え、記述する。 ・日本とロシアの資源の共同開発の是非について話し合い、意見を発表する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・様々な考え方を知ることが大切であることを伝え、活発な意見交換を促す。 	<ul style="list-style-type: none"> ・日本とロシアの資源共同開発の在り方について、積極的に話し合いを行い、多面的・多角的に考察している。 <p>【思考・判断】 【資料活用の技能・表現】 〔ワークシート、発表〕</p>

最初に、環日本海経済圏に含まれる国を確認した。北朝鮮が抜けてしまったり、「環太平洋」と誤解してオーストラリアをあげたりするなど、正確な理解に至っていない生徒もみられたため、環日本海経済圏の目的や意義について再度説明した。

次に、サハリンプロジェクトを理解するための前提の一つとして、日本の天然ガス輸入の現状を表す円グラフを作成させた。そして、ワークシートに掲載したサハリンプロジェクトについてのトピック記事（市販の資料集から引用したもの）を読み、作成した円グラフや教科書、資料集等も参考にして、日本はロシアと資源の共同開発をすすめるべきかどうかについて考え、記述させた。その後、座席が近い生徒同士でグループを作らせ、話し合いをさせた。なかなか話し合いが始まらなかったため、「異なる意見を出し合うことで、幅広い見方や考え方ができるようになる」ということを伝え、どんな考えでもよいので積極的に話すよう促した。また、ワークシートのトピック記事だけにとらわず、様々な角度からの意見を出してみるよう指示した。やや遠慮がちではあるが、次第に活発に話し合いをする様子がみられた。本時はグループとしての結論を出すことまではせず、意見を交換して他者の異なる考えをよく聞くこととした。

最後に、何人かの生徒に意見を発表させた。あわせてグループでの話し合いの状況についても確認した。日本はロシアと資源の共同開発をすすめるべきかどうかについての生徒の意見は、「YES」が約7割、「NO」が3割ほどであった。サハリンプロジェクトについてのトピック記事からは、ロシアに対してやや批判的な印象を受ける



(話し合いの様子)

ため、「NO」という意見が多くなるのではないかと予想していたが、それに反して「YES」が多数を占める結果となった。

「NO」と答えた理由としては次のようなものがあり、トピック記事の記述に影響を受けて記述した生徒もみられた。

- ・開発が終わったあと、ロシアが利益を独り占めしてしまいそうだから。
- ・もっと確実に石油や天然ガスを輸出してくれる国に頼った方がよい。
- ・ロシアが約束を守らないから。日本にもっと利益があればやってもいい。
- ・他の発展途上国と開発した方がよい。

「YES」と答えた生徒は、トピック記事の内容だけでなく、資源に乏しい日本の実情や、地理的な位置関係、国際関係など、様々な面から考えて理由を述べていた。「YES」と答えた理由については次のようなものがあった。

- ・日本は資源が乏しいので、海外に依存するのは必然だから。
- ・日本とロシアの関係をよくするために必要。
- ・紛争などもおきるので、石油などの資源をなるべくいろいろな国から輸入できるようにしたほうがいいから。
- ・ロシアは日本と近距離なので、石油や天然ガスを獲得しやすい。
- ・ロシアは近いので、近くから輸入できた方がいろいろな製品が安く作れる。

ワークシートの記入状況を見ると、ほとんどの生徒が自分の意見とその理由を明確にすることができた。また、話し合いをしたときや発表の際に、自分と異なる意見を聞き、メモをとることができた。

物事の是非を判断する場合には、判断するための材料をなるべく多く集め、様々な角度から考えることが重要であることを重ねて指摘した。

地理演習プリント⑤

名前 _____

《ロシア》

◇ 環日本海 経済圏に含まれる国は何か国ですか。国名を挙げてみよう。

ロシア
日本
韓国
北朝鮮
中国

➔

5 国

◇ 日本の液化天然ガス輸入について、国名を記入してグラフを完成させよう。(データブック p.88)

総輸入量
62,189 千トン

(データは 2006 年)

◇ 日本は、ロシアと共同開発をすすめるべきですか。

YES or NO

(理由)

もっと確実に石油や天然ガスを輸出してくれる方がよい
 国に頼った方がよいと思いましたがそれに共同開発して
 安く買えるから良いと思いましたが

⇕

※ 反対意見も、書いておこう。

ロシアは日本から近距離だから確保しやすい
 石油や天然ガス
 安く買えるためにならなく色々な国から輸入している方がよい
 元金を手とが
 世界の情勢の悪化

(種東ロシアの地図)
 ・主な資源の分布
 ・鉄道
 ・パイプライン計画
 ・日本企業の進出状況

サハリンプロジェクトに関するトピック
 (内容)
 サハリン沖の大陸棚に存在する石油資源の開発が1990年代から始まった。日本もこのプロジェクトに参加しているが、2006年以降、日本にとって難しい状況となっている。ロシアが突然、一つの産区の上り許可を取り消したり、日本に輸出される予定だった天然ガスが中国に輸出されることになったりしている。日本のサハリンプロジェクトは、転換点にたたざれている。

【「NO」という意見の生徒のワークシート例】

地理演習プリント⑤

名前 _____

《ロシア》

◇ 環日本海圏経済圏に含まれる国は何か国ですか。国名を挙げてみよう。

日本
ロシア連邦
朝鮮民主主義人民共和国
大韓民国
中国

⇒ 5 か国

(極東ロシアの地図)

- ・主な資源の分布
- ・鉄道
- ・パイプライン計画
- ・日本企業の進出状況

◇ 日本の液化天然ガス輸入について、国名を記入してグラフを完成させよう。
(データブック p.88)

総輸入量 62,189 千ト

国名	割合 (%)
日本	22.5
その他	16.1
アルゼイ	10.5
リナル	12.0
マレーシア	19.6
オーストラリア	19.3

(データは2006年)

◇ 日本は、ロシアと共同開発をすすめるべきですか。

YES or NO

[理由]

近から輸入できるようにするべき

開発をしたほうがいいと思う

いそを豊かなくつくる。

⇕

※ 反対意見も、書いておこう。

地球温暖化が心配だから。

サハリンプロジェクトに関するトピック

(内容)

サハリン沖の大陸棚に存在する石油資源の開発が1990年代から始まった。日本もこのプロジェクトに参加しているが、2006年以降、日本にとって厳しい状況となっている。ロシアが突然、一つの鉱区の工事許可を取り消したり、日本に輸出される予定だった天然ガスが中国に輸出されることになったりしている。日本のサハリンプロジェクトは転換点にたたざれている。

3 まとめ

(1) 成果

本事例では、地図化したりグラフ化したりする作業を行ったあとに、それを活用して説明や発表、討論等を行うという、作業的な学習から言語活動へと展開する授業を実践した。その際、なるべく短時間でできる内容で、実践回数を多く設けることを心がけ、地誌学習の中で5回の実践を行った。**実践1**で韓国の気候と文化の関連を、**実践2**では中国における人口集中の理由を、**実践3**では東南アジア3か国の輸出品目の変化の理由とそれを説明するために必要な資料について考えさせた。また、**実践4**でEU加盟国における格差拡大の影響を、**実践5**ではロシアとの資源共同開発の是非について考察するとともに話し合いをさせた。このように、各実践で扱う地域に応じて、作業内容や課題の設定を変えたり、思考パターンや学習活動に変化をつけたりして、生徒が飽きることのないよう工夫した。

実践の中で作成したグラフや地図は、いずれも教科書や資料集等に掲載されているものであり、これまでの授業であれば、単に見させたり印を付けさせたりするだけで済ませていたものであった。

しかし、生徒が自ら作業をすることで、それらが示す地理的事象をよりの確に把握することができ、地理的な見方の育成につなげることができた。

作成したグラフや地図を使って、考察したことを記述したり、自分の意見を述べたり話し合ったりする活動を繰り返したことで、情報を読み取る力や、思考力、表現力の育成に一定の成果をあげることができた。

生徒の感想でも、「グラフから情報を読み取る力がついた」、「説明を聞くだけでなく自分で考えたのでよかった」、「知識を覚えるだけでなく考察することも大切だということが分かった」といった肯定的な意見が大部分であった。また、今回の学習が、今後の自分の学習にどのように役に立つと思うかを聞いたところ、「地理の勉強をする際に『なぜこうなるのか』ということを考えながら進めていくことができる」、「自分の意見を述べるためにどのような資料が必要であるかを考えるのに役立つ」「地図やグラフにまとめられる」というように、地理的技能や、資料を活用する力、思考力等の面での効果を実感していることが分かった。

(2) 課題

生徒はグラフや地図を作成する作業にあまり慣れていなかったため、最初は教師の予想以上に時間がかかった。回数を重ねることで上達する部分もあるが、作業は必要なものだけに限って、なるべく少なくするよう心がけた。

考察することや、考えたことを文章で記述すること、発表や話し合いをすることは、十分な時間を確保して行いたいのが、実際にはあまり時間をかけることができず、常に葛藤があった。単元のねらいを踏まえて、それに沿ったテーマで学習課題を絞り込む工夫が大切である。また年度当初から年間計画の中に位置づけ、計画的に実践を行うことが必要である。

また、生徒のワークシートには、教師が想定していなかった様々な解答が書かれていた。ぜひ全員に紹介したいようなものや、解説する必要があるものもあったが、ワークシートを回収してチェックし返却するまでには一定の時間がかかり、難しかった。授業中にできるだけ机間指導を行い、さまざまな意見を早めに見つけて対応する必要性を感じた。また、より多くの生徒の意見をとりあげ紹介するために、**実践3**においては、生徒が記述している時に机間指導をしながら、何人かのワークシートをビデオカメラで撮影してスクリーンに映し、全員に紹介する方法をとった。このことは、書くことが苦手な生徒を指導するという点でも効果があった。これらの機器が使えるならば有効な方法の一つである。

生徒の多くは作業を含めて授業にはまじめに取り組むが、考えや意見を書くことに対して「苦手だ」、「面倒くさい」と感じ、なかなか取り組めない生徒もみられた。授業中に声をかけたり、ワークシートにコメントを書いたりするなど個別指導で対応したが、十分な効果をあげることができなかった。今後は、多様な生徒の実態を踏まえた、よりきめ細かい課題設定や発問、ワークシートの作成などを工夫したい。